



この人に訊く

ことに、他の線量計8台はすでに撤去が完了していたのです。理由は、この地区の住民から問い合わせや説明会が求められなかったから。

原発事故はまだ収束していません。未だに危機的な状況にあるのです。7000人もの方が日々、作業員として働いていることに感謝しますし、自分がそこに関われないという後ろめたさ、申し訳なさみたいなものもあるけれども、その方たちの権利、健康が本当に

守られているのか。そういう疑問もあります。そんな危機的状況にありながらリアルタイム線量計を撤去してしまうという原子力規制委員会のやり方には疑問を感じます。

会津若松は安全だと言っている一方、気をつけた方がいいという言い分もあるのですから、両方の話を聴いて、市独自にどうするかを決めていくべきだと思えます。会津若松は、気をつければ生活していける

の方です。でも、「自己責任を取れ」というのではなく、「家族が健康でなければ子育ても十分に出来ません。みんなが健康に過ごせるよう、いっしょに考えていきましょう」という活動なんです。

食品測定の数値を公表するかどうかという点についても、私たちは話し合いました。測定器の性能はいいけれども、私たちは所詮素人、科学者でも何でもない。数値を発表したら、その数値だけが独り歩きし、思わぬ方法に

(完)

たりする仲間がいると分かるだけで、そこから次へ進むことができます。そういう例を、私はたくさん見てきました。

子どもは子どもなりに、親は親なりに、高齢者は高齢者なりにみんな不安を抱えているんです。その方たちがセンターに来ることで、「悩んでいるのは自分一人じゃない。自分がおかしいんじゃない」と感じてもらえたらいいなと思っています。

—— 放射能情報センターの発足当時、どれくらい存続させるべき組織だと考えていらつしやいましたか？

片岡 発足当初はただ突っ走るばかりで、あまり考えてはいませんでした。今でも、まあ10年かなと思っています。今がちょうどその半分、10年経てば、二ノズが変わって来ると思っています。そういう二ノズはわかりませんが、その時点で足を止めて、その後どうしようか考えたいと思っています。

10年間、私たちがやれることをやって、その時点でも子どもが健康でいられたら素晴らしいと思うし、自分たちがやってきた甲斐があったということにもなります。もしかしら手が足りなかったところがあれば、新しい課題が出てくるかも知れません。一応10年を目安にがんばっていいと思っています。

(おわり)



片岡 翌週になって住民側が市に確認したところ、結果的にその線量計の撤去は中止になったことが分かりました。しかし驚いた

会津放射能情報センター

代表

片岡輝美さん

る場所だと私は思っています。放射能情報センターでは、「こんな数値が出ました。私ならば、こういう判断をします」と言うけれども、「こうして下さい」とは言いません。なぜならば、安全かどうかを決める主体はその人にあるからです。いっしょに悩んだり、考えたりはするけれども、最終的に決めるのはそ

て来ていただいた方にはお教えしています。

まずは事実を知ること。そこからは次のステップは踏み出せないと思うんです。健康相談会の時も、不安な顔をしていたお母さんたちが、先生と話し合った後にはホッとした表情になっている。山崎先生は「この点は大丈夫だけれど、ここの点は気をつけた方がいい」と交通整理をしてくださるんです。将来的な不安を解消するにはどうしたらいいのか。お母さんたちにはそれぞれ不安があるけれども、いっしょに泣いたり笑っ